

# 案内書

第70回日本生物工学会大会 附設  
**機器・試薬・書籍等**

# 展示会

環境問題

食糧問題

医療問題

エネルギー問題

期日

2018年9月5日(水)・6日(木)・7日(金)

会場

関西大学 千里山キャンパス 4学舎4号館3F  
(大阪府吹田市山手3-3-35)

●主催

(公社)日本生物工学会

大会実行委員長 片倉 啓雄

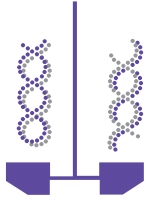
(関西大学 化学生命工学部 生命・生物工学科 教授)

●運営管理/申込先

株式会社 エー・イー企画

〒101-0003 東京都千代田区一ツ橋2-4-4 一ツ橋別館4F

電話 03(3230)2744(代表)



## 大会開催のご挨拶

各位

謹啓 貴社にはますますご清栄のこととお喜び申し上げます。

平素より日本生物工学会の諸事業に格別のご高配、ご支援を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、第70回日本生物工学会大会は、平成30年9月5日(水)～7日(金)の3日間、大阪府吹田市の関西大学千里山キャンパスで開催いたします。初日の5日は、9時より各賞の授賞式、受賞講演を行い、18時からキャンパス内の100周年記念会館で懇親会を開催します。6日は17時から若手会総会・交流会を兼ねたものづくり交流サロンを開催し、参加企業から企業の技術シーズと魅力をアピールして頂きます。研究発表は5日の午後から7日の午前中まで、口頭発表形式で開催し、7日の午後には2部制でシンポジウムを開催します。シンポジウムは21件開催し、幅広い分野からの参加者が見込まれます。

一般講演、シンポジウムは隣接する2つの建物で行い、展示会場はそのセンターに配置しておりますので、講演の合間を利用した参加者の来訪が期待できます。このビジネスと交流のまたとない機会を活用して頂きたく、是非とも、本大会への御出展をお願い申し上げます。

なお、展示運営業務に関しては株式会社エー・イー企画に委託しております。お問合わせ・お申込みは同社宛に直接ご下命くださいますようお願い申し上げます。

謹白

平成30年3月

第70回日本生物工学会大会  
実行委員長 片倉 啓雄  
(関西大学 化学生命工学部)



# シンポジウム課題は下記の通りです (出展の参考にして下さい)

## ① 資源作物生産から発酵生産までをトータルシステムとして俯瞰する

▶オーガナイザー: 酒井 謙二(九州大), 青柳 秀紀(筑波大), 伊藤 幸博(東北大)

資源作物を原料とする有価物の発酵生産技術の研究開発は本会の重要な専門領域であり、発酵基質に適した資源作物のデザイン、優れた微生物の獲得・育種および、効率的生産プロセスの構築などに細分化され、各領域で成果を上げている。これらを実用化へステップアップするためには、異なる領域研究者(発酵工学者と植物育種学者)の連携とともに全生産フローを俯瞰できる視点・感性が求められる。本シンポジウムでは、各領域の最新成果を紹介しつつ、技術・資源をトータルシステムとして産業界へ応用するための問題提起・あり方を議論する。

## ② 糖鎖工学技術がもたらすバイオ医薬品の新潮流

▶オーガナイザー: 三崎 亮(阪大), 加藤 紀彦(京大), 千葉 靖典(産総研)

バイオ医薬品市場の急速な拡大に伴い、翻訳後修飾の制御を含めた生産物の高品質化が切望されている。特に、糖タンパク質性医薬品が提示する糖鎖構造の多様性は、高品質化に向けて解決すべき問題点である。本シンポジウムでは、高付加価値バイオ医薬品生産を目指した糖鎖構造の制御・均一化、および糖鎖を活用した創薬に注力する国内産学の研究者と生産者より、工学的糖鎖改良方法の現況と新たに見えてきた課題を紹介いただき、本学会にて糖鎖工学が産学協働を目指すべき展望を議論したい。

## ③ 工学が見出すエッセンシャル細胞培養

### ～動物細胞培養の根本に工学はどう立ち向かうか～

▶オーガナイザー: 河原 正浩(東大), 加藤 竜司(名古屋大), 児島 宏之(味の素)

動物細胞培養は、次世代バイオ医薬品(抗体医薬や細胞医薬)の根幹を担う基盤であるが、さらなる高度な細胞培養を実現するには更なる工学的飛躍が強く求められている。現在も、多くの細胞培養を牽引するのは、歴史から受け継いだ容器、培地組成、モニタリング方法などの「常識」と「ブラックボックス」である。細胞を用いる産業の更なる発展には、現在の細胞培養の根幹に、工学のメスを入れる必要がある。本シンポジウムは、現在の最先端工学技術の観点から、いかに常識を覆す「新しい細胞培養」を工学が生み出せるか、その課題と可能性について議論する。

## ④ 新しい農業と未来の食料のための生物工学

▶オーガナイザー: 今井 泰彦(キッコーマン)

人口増加に合わせて持続可能に食料を増産してゆくためには、高効率なスマート農業や、化石製品に頼らない新しい生物系農業・肥料が重要となってくる。さらに限られた農地に代わり、気候変動の影響を受けにくい植物工場も益々発展すると思われる。そのための周辺技術開発も必要となる。一方、従来の作物に代わる水生植物の様な新たな食料の栽培や、人工肉(培養肉)開発への挑戦も進行中である。これらに関するトピックスを紹介し、持続可能な社会へ向けた産学連携による生物工学の方向性を考える機会を提供する。

## ⑤ 発酵食品の機能性を考える～一次機能から三次機能まで

▶オーガナイザー: 高瀬 良和(霧島酒造)

日本文化の和食が見直され、世界でその価値が認められるようになった。和食の中で発酵食品がなす役割は、栄養価値、おいしさを作り出すだけでなく、近年、生体調節機能に与える影響も多く発表されている。健康寿命を延ばす上にも食生活の中で日常的に食することが大切である。本シンポジウムでは、微生物が関与する発酵食品の機能を今一度考えてみることで産学から新しい発想が生まれることが期待される。

## ⑥ 構造と機能デザインによる有用人工酵素の創製と応用展開

▶オーガナイザー: 大島 敏久(大阪工業大)

近年の酵素の立体構造解析、ゲノム情報解析、生化学的機能解析などの発展により、天然にはない産業的に有用な人工酵素を目的にデザインし、新規機能をもつ人工酵素を創製することが容易になっている。酵素の精密な構造と機能情報を踏まえた、反応特異性、基質や補酵素特異性の改変、触媒活性の増強、耐熱性や有機溶媒耐性などを改善させた人工酵素の創製に関するこれまでの研究成果をシンポジウムでとりあげ、今後の有用酵素の機能デザイン法の開発と応用展開をはかり、この分野の今後の飛躍を図る。

## ⑦ スマートバイオデザイン:ナノからマクロスケールまでの様々な階層レベルにおけるバイオ関連機能と構造の合理的創出を目指して

▶オーガナイザー: 新井 亮一(信州大学), 梅津 光央(東北大), 座古 保(愛媛大)

近年、合成生物学やナノバイオ関連研究の進展は著しく、生物工学分野においても今後益々重要となる。そこで、本シンポジウムでは、ナノからマクロスケールまでの様々な階層レベルにおける先進的なバイオ関連機能及び構造の合理的創出を目指す「スマートバイオデザイン」をコンセプトに掲げる。多様なアプローチで「スマートバイオデザイン」に挑む、基礎から応用まで幅広い分野の研究者が一堂に会して議論することで、関連研究の創発やイノベーションを生み出す新潮流を起こす。

## ⑧ タンパク質と材料界面の相互作用の本質に迫る

▶オーガナイザー: 堀 克敏(名古屋大), 黒田 章夫(広島大), 神谷 典穂(九大), 梅津 光央(東北大)

バイオと材料が織りなす新しい融合マテリアルやバイオデバイスの開発には、融合界面を設計・制御することが重要となる。単に材料表面を修飾してタンパク質を固定化する様な従来技術から脱却し、生体分子認識反応を効率的に行わせる様な画期的な界面制御技術を進展させなければならない。本シンポジウムでは、タンパク質と材料界面、無機結晶界面、ナノマテリアル等との相互作用の本質を探り、新しいバイオ無機ハイブリッド材料の創生も目指して議論する。

## ⑨ 真核微生物におけるシグナル伝達と代謝の接点を探る —発酵調節の根源的な理解に向けて—

▶オーガナイザー: 渡辺 大輔(奈良先端大), 水沼 正樹(広島大)

細胞は、環境に応じたシグナル伝達を介して適切な代謝経路を作動させ、自らを構築するための材料やエネルギーを生産する。酵母や麹菌などの真核微生物において、多様なシグナル伝達経路が見出されているにも関わらず、それらの代謝や発酵生産への関与については未知な部分も多い。本シンポジウムでは、シグナル伝達の観点から代謝調節の鍵を握るメカニズムの解明を目指す若手研究者が集い、そのバイオテクノロジーにおける意義を提唱したい。

## ⑩ エネルギーを使う、捨てる光合成の再最適化 —光合成生物学にむけた未踏研究—

▶オーガナイザー: 魚住 信之(東北大), 清水 浩(阪大)

継続的な光合成には、光エネルギーを使うとともに、上手く捨てる機構が必要であることが分かっていた。現存の光合成生物は局所環境に適応進化し、「光エネルギーの効率的利用」と「過剰光からの防御」のバランスを調節している。本シンポジウムでは、光合成生物の工学利用を目指し、プロトン駆動力の解析や光化学系における電子伝達と中枢代謝のシステム解析を軸にして、光合成の最適化に導くまで教科書には記述されていない最新の研究を展開する研究者を招待し、光合成生物学の新たな展開を議論する。

## ⑪ 半金属元素のバイオテクノロジー

▶オーガナイザー: 山下 光雄(芝浦工大), 池 道彦(阪大)

近年、半導体材料等としてヒ素・アンチモン・セレン・テルル等の半金属元素の産業利用が活発になっているが、これに伴い、これら元素による環境汚染の浄化、資源の回収、及びこれら元素を含む材料合成に関する新技術の開発の需要が高まっている。本シンポジウムでは、微生物の代謝の活用によりこれら半金属元素を自在に変換する技術の開発状況について、4名の研究者から講演頂き、半金属元素のバイオテクノロジーという新たな研究領域の可能性について議論する。

## ⑫ 黒麹菌・白麹菌の研究からつなげる産業振興

▶オーガナイザー: 外山 博英(琉球大), 塚原 正俊(バイオジェット)

黒麹菌 *Aspergillus luchuensis* は、国菌の1つとしても認定されている重要な微生物であるものの、近年まで分類が混乱していた。最近、黒麹菌は *A. luchuensis* として再定義されると共に全ゲノム配列が公開されたことから、黒麹菌研究の基盤が整った。本シンポジウムでは、これらの経緯や最新の研究成果と共に文化的な側面について紹介することで、基盤研究からつなげる地域貢献について議論したい。

## ⑬ 複雑組織製造に必要な基盤技術を考える

—どこまで出来て、何が足りないのか?—

▶オーガナイザー: 長森 英二(大阪工業大)

単一細胞種を用いた再生医療の実現が近づき、これを下支えする細胞製造技術がアカデミアや企業によって活発に研究・構築されつつある。一方、次世代再生医療に期待される血管網や神経網など複雑構造を有する機能的組織製品の製造には未だ超えるべきハードルは多く、新領域的技術の創生・具現化は欠かせない。複雑組織工学の設計・製造を目指し活発に活動するバイオニアや若手研究者による講演とパネルディスカッションを通し「現状技術ではどこまで出来て、何が足りないか」を議論することを目的とする。

## ⑭ SDGsに資する環境共生微生物を活用した アグリバイオ工学研究の新展開

▶オーガナイザー: 宮本 浩邦(サーマス・千葉大・理研), 菊地 淳(理研)

自然界では多くの生物が共生関係にあり、相互に影響しあっている。本シンポジウムでは、これらの共生生物に関わる研究動向として、根圏微生物と植物との相互作用、腸内フローラと家畜・家禽類、魚類の健康との関係、環境微生物を活用した排水負荷の低減などに関する最新のフィールド・オミクスやデータサイエンスを紹介する。これらの研究事例を対象として、SDGs (持続可能な開発目標)を視野に入れた生物工学的アプローチの必要性について議論していく。

## ⑮ 地域から世界へ、グローバルバイオテクノロジーで創る 新しい価値

▶オーガナイザー: 古賀 雄一(阪大), 河原崎 泰昌(静岡県立大),  
仲嶋 翼(三菱UFJリサーチ&コンサルティング)

日本・世界各地の地域生物資源を活用し、食品、医療、環境などの社会問題を解決することが期待されている。地域生物資源活用において我が国が目指すビジョンや政策・検討状況を共有し、さらに国内外の先進事例動向をまとめ、生物工学が世界で持続的に認められる新しい価値を地域生物資源から創造するためにどのように関わることができるのかを考える。

## ⑯ 環境は持続可能か?

—地球規模の物質循環を生物工学から考える—

▶オーガナイザー: 新谷 政己(静岡工大), 寺田 昭彦(東京農工大)

持続可能な社会を構築する上で、窒素やリン等農業に必須な物質の地球規模の循環は重要である。それらの物質は人類の発展とともに急激に消費され、その循環は不可逆的な閾値を超えつつある。こうした危機的状況は、既に度々注目を集めてきたものの継続的な発信がなされなくなりがちである。本シンポジウムでは、いくつかの元素の物質循環に焦点を絞り、日本固有の現状や対策等の最新情報を提供し、参加者にも可能な取り組みについて議論する。

## ⑰ スマートセル開発のためのバイオ技術とデジタル技術の革新と融合 バイオ生産に資する DBTLサイクルの構築に向けて

▶オーガナイザー: 近藤 昭彦(神戸大)

スマートセルによる物質生産の実現には膨大な生物情報から目的化合物を効率よく生合成する代謝経路・遺伝子のデザイン(Design)、ゲノム編集技術などを利用した生物機能の精密な発現制御や大サイズ遺伝子の導入(Build)、作成した生物から得られる膨大な情報の把握(Test)と生物機能ルールの抽出(Learn)が重要である。バイオ技術とAI・デジタル技術の融合によって新たなモノづくりを実現するスマートセルインダストリーの最新の取り組みについて議論する。

## ⑱ 1細胞解析に向けた刺激応答性分子ツールの創製と応用展開

▶オーガナイザー: 吉野 知子(東京農工大), 山口 哲志(東大)

近年、治療用細胞・機能性細胞の生産や医療検体の細胞診断に資する1細胞解析・操作技術が盛んに研究されている。中でも、個々の細胞を選択的に配置・単離し、ユニークな1細胞解析を実現できる刺激応答性の分子ツールが注目されている。そこで、1細胞解析に資する刺激応答性材料やそれらを用いたユニークな1細胞解析法を開発している若手研究者が最新の研究成果を報告し、将来展望や新規材料・技術の開発指針についてシニア研究者とともに熱く意見交換する。

## ⑲ ASEANにおける生物資源の社会実装を目指した研究ネットワークワーキング

▶オーガナイザー: 藤山 和仁(阪大), 福崎 英一郎(阪大)

生物資源が豊富なASEAN地域で活躍する研究者による生物資源利用研究の事例を紹介する。また、同地域の微生物保存機関ネットワークについて説明し、資源へのアクセス時に懸念される生物多様性条約関連事項の解説を受ける。今後ASEAN地域との研究連携の強化と促進を図り、学会・研究者間のネットワーク形成を目指す契機とする。

## ⑳ 新時代の物質生産宿主開発の方法論：ゲノムを大規模に編集する。代謝計測から設計図を書く

▶オーガナイザー: 丸山 潤一(東大), 松田 史生(阪大)

微生物を利用した有用物質の生産性の向上には、宿主の代謝経路の改変が有効である。近年、様々な生物で遺伝子改変の劇的な効率化をもたらしたゲノム編集をもとに、宿主に対して多重・多段階の遺伝子操作を効率よく行う技術が開発され、代謝経路を無限に改変することが可能になった。これにより、代謝制御機構の理解に基づく、より合理的な代謝設計が求められるようになってきた。本シンポジウムでは、物質生産の宿主開発技術の最先端とともに、代謝経路間の相互作用を解析する新規解析手法を紹介し、物質生産宿主開発の新たな方法論について議論する。

## ㉑ 生物系研究者のための電気化学入門～その実験大丈夫?～

▶オーガナイザー: 若井 暁(神戸大)

近年、電気化学実験を行う生物系研究者が増えているが、電気化学を専門とする研究者から実験系と解釈における問題点を指摘されるシーンも見られる。異なる研究領域の研究者が異分野融合を進めていく上で、このようなズレは致命的である。そこで、非生物系の他学会で活躍する新進気鋭の若手研究者を講師として招き、初心者が間違えそうな例と共に、明日にでも実験を始められる基礎から、最新の異分野融合展開について講演を頂く。



# 展示会場小間割図 (予定)

(千里山キャンパス 4学舎4号館 3F)



● 学会では下記のような一般講演が行われます。

技術分野		対象	
分野			
遺伝学, 分子生物学 および遺伝子工学	分類, 系統, 遺伝学 遺伝子工学	原核微生物 真核微生物 酵母 糸状菌 アーキア	システムバイオロジー ナノバイオテクノロジー マイクロアレイ ゲノミクス プロテオミクス
酵素学, タンパク質工学 および酵素工学	酵素学, 酵素工学 タンパク質工学 抗体工学	特殊環境微生物 光合成微生物 藻類 植物細胞 動物細胞	メタボロミクス ケミカルバイオロジー バイオイメージング PCR 分子育種
代謝生理学・発酵生産	発酵生理学, 発酵工学 代謝工学 オミクス解析	植物 動物 有機酸 乳酸 脂質	情報伝達 培養制御 固定化 分離, 精製
醸造・食品工学	醸造学, 醸造工学 食品科学, 食品工学	糖, 糖鎖 核酸, ゲノム プラスミド, ファージ RNA, RNAi 生理活性物質	組織培養 組織, 器官 医薬, 医薬品 食品 免疫
環境バイオテクノロジー	環境浄化, 修復, 保全技術 環境工学, 廃水処理技術 バイオマス, 資源, エネルギー工学	抗生物質 アミノ酸 ペプチド 生体高分子 タンパク質	生態工学 CO <sub>2</sub> H <sub>2</sub> エタノール
生物化学工学	生物化学工学 培養工学 バイオプロセス	抗体 酵素: 糖質関連 酵素: ペプチド・アミノ酸関連 酵素: 脂質関連 酵素: その他	難分解物質 生分解物質 廃棄物 水 土壌 その他
植物バイオテクノロジー	植物細胞工学, 組織培養, 育種工学		
動物バイオテクノロジー	生体医用工学 セル&ティッシュエンジニアリング		
バイオ情報工学	生体情報工学, バイオインフォマティクス システムバイオロジー		
分析計測化学	バイオセンシング, 分析化学 センサー, 計測工学		
生体関連化学	生合成, 天然物化学 有機化学, 高分子化学		
生体分子工学	核酸工学 ペプチド工学 脂質工学 糖鎖工学		

● 学会参加人数(昨年) 1,600人



## 出品要綱

### 会期

2018年9月5日(水) 10:00 ~ 17:30

9月6日(木) 9:00 ~ 17:30

9月7日(金) 9:00 ~ 14:00

※予定です。

### 会場

関西大学 千里山キャンパス 4学舎4号館3F

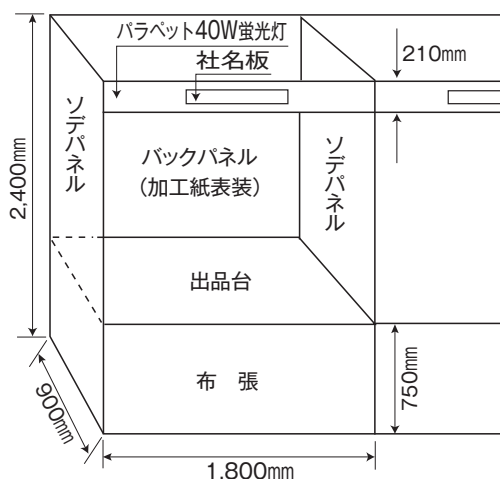
(〒564-0073 大阪府吹田市山手3-3-35)

### 小間規格と出品料金

#### ◆ Aタイプ(機器・試薬等)

**216,000円**

(小間料金¥200,000+消費税¥16,000)



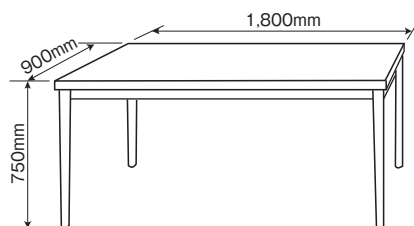
- ◎ 小間サイズ：W1,800×D900×H2,400mm
- ◎ セット内容：バックパネル(蛍光灯40W、社名板付)、イス1脚、出品台(W1,800×D900×H750mm、白布にて台上を覆い、腰は青色系の布で覆います)
- ◎ バック・ソデパネルはベニヤパネルを使用し、加工紙表装をします。
- ※ 基礎小間には既設の展示台が付いておりますが、床面に直接機器類等を設置したい場合には、申込書に出品台不要のご記入をしてください。

◎1小間当たり1名様親会に招待いたします。

#### ◆ Bタイプ(書店、出版社のみ)

**32,400円**

(小間料金¥30,000+消費税¥2,400)



- ◎ 小間サイズ：出品台のみ
- ◎ セット内容：出品台(W1,800×D900×H750mm、白布にて台上を覆い、腰は青色系の布で覆います) 社名板付、折りたたみイス 1脚

### 電力料金

(料金には消費税が含まれております)

電力(100V)ご使用の場合、電源仮設工事費および消費電力料金は出品者の負担になります。料金は下記の通りです。

500Wまで/¥32,400      501W以上1KWまで/¥37,800

※ ただし、1KW以上ご使用の場合は、1KW増すごとに¥16,200を加算させていただきます。

※ 200V(三相・单相)をご使用の場合は、別途仮設となり割高になりますのでご了承ください。料金は会期後にご請求いたします。

## 出品申込方法

- (1) 申込方法 規定の申込書(別紙)に必要事項をご記入の上、Faxかメールにてお申込みください。
- (2) 申込締切日 **2018年6月29日(金)**  
※小間数に制限がありますので、お早めにお申込みください。
- (3) 申込先 **株式会社 エー・イー企画**  
第70回日本生物工学会大会展示会係 担当：関根一成・西尾文利  
〒101-0003 東京都千代田区一ツ橋2-4-4 一ツ橋別館4F  
電話 03-3230-2744(代表) FAX 03-3230-2479  
E-mail : sbj@aeplan.co.jp
- (4) 振込銀行 みずほ銀行 九段支店 普通 1801724 70生物工学展示会事務局

## 小間の割当て

出品申込みを受付後、出品物の種類・形状・重量・小間数などを考慮の上、出品者にご通知申し上げます。出品者説明会は行いませんのでご了承ください。

## 出品の取消し

出品申込書の提出後は、学会事務局が不可抗力と認めた事故以外は取消しはできません。したがって出品料金の返却はいたしませんのでご了承ください。

## 展示出品台

基礎小間に既設出品台が付いておりますが、床面に直接機器類を設置したい場合は申込書に出品台不要のご記入をしてください。

なお、展示出品台の有無の変更は搬入日の2週間前までにお申出ください。

## 出品物の管理

各出品物の管理は出品者が責任をもつものとし、展示期間中の出品物の盗難・紛失・火災・損傷など、不可抗力による出品物の損害に対して、補償などの責任は一切負いませんのでご了承ください。

## 出品物の搬入・搬出

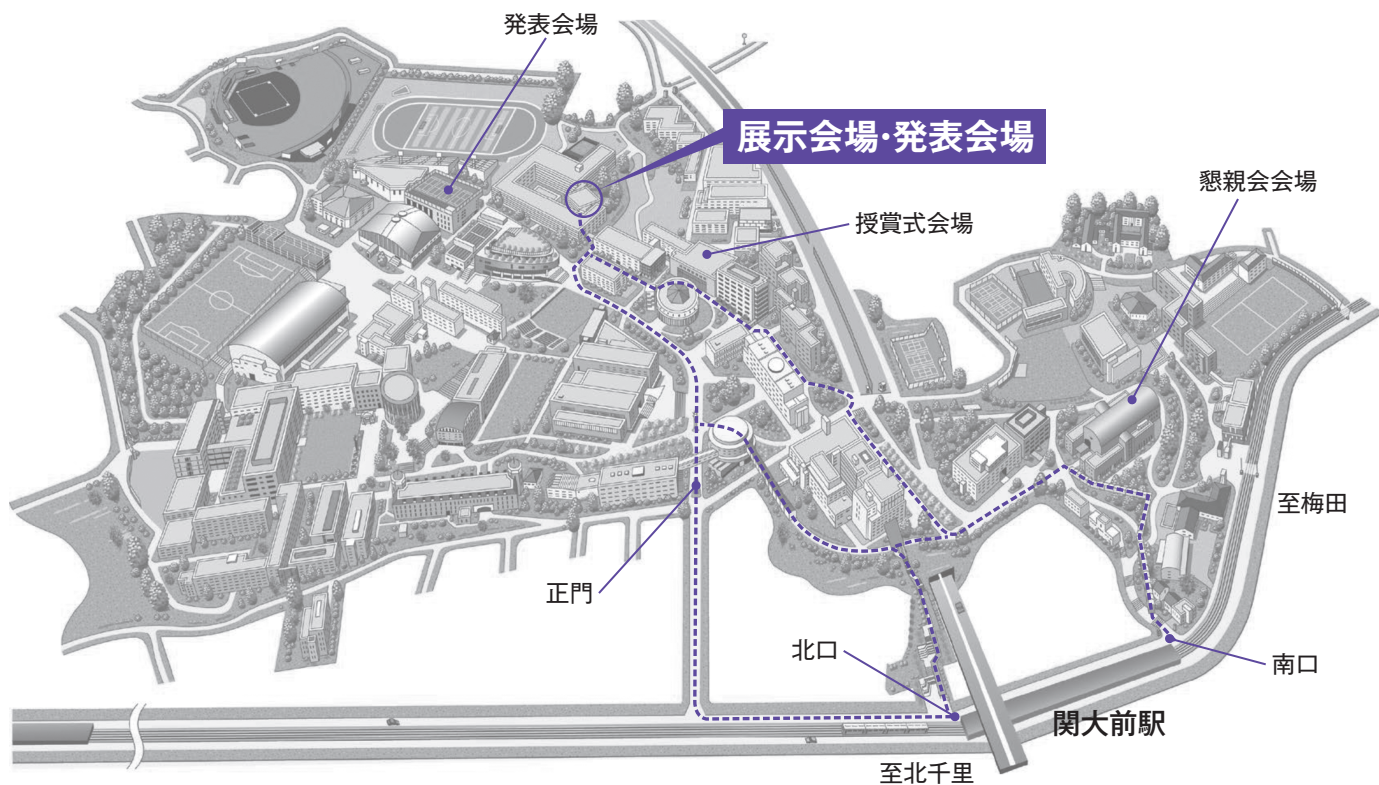
細部につきましては、後日出品者にご通知申し上げます。

搬入 2018年9月4日(火) 14:00 ~ 18:00 まで

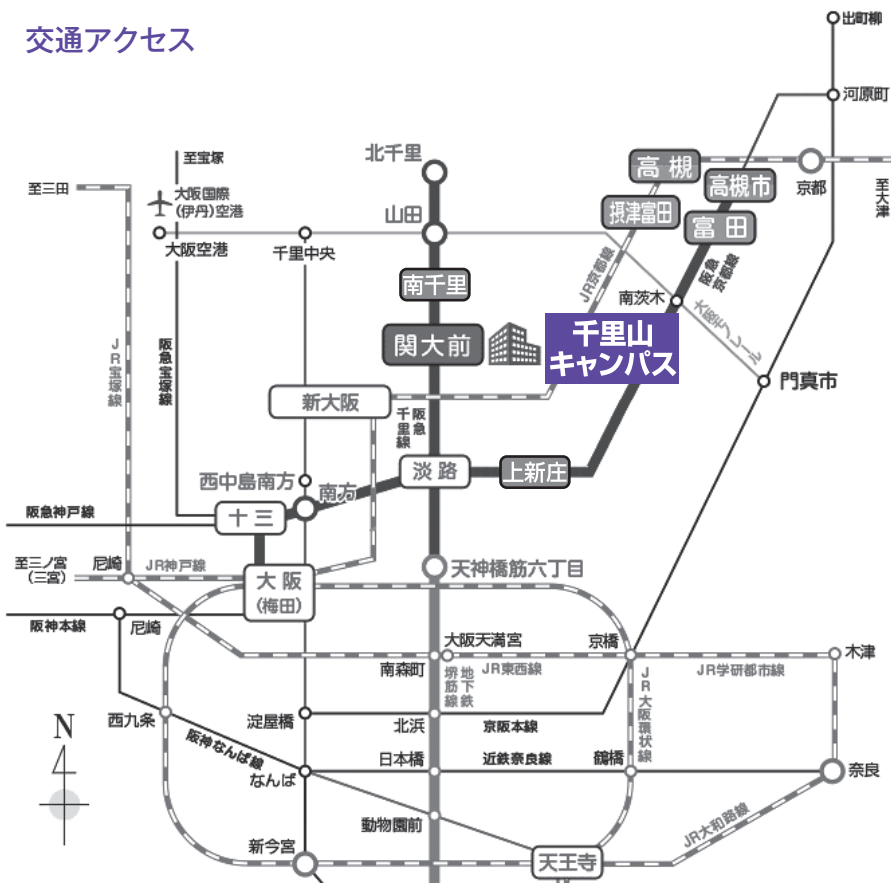
搬出 2018年9月7日(金) 14:00 より



# 会場案内図



## 交通アクセス



### 地下鉄利用のアクセス

地下鉄堺筋線(阪急電鉄千里線に相互乗り入れ)が阪急電鉄「淡路」駅を経て「関大前」駅に直通しています。

### 新幹線「新大阪」駅からのアクセス

- 地下鉄および阪急電鉄利用の場合  
JR「新大阪」駅から地下鉄御堂筋線「なかもず」行で「西中島南方」駅下車、阪急電鉄に乗り換え「南方(みなみかた)」駅から「淡路」駅を経て「関大前」駅下車(この間約30分)、徒歩約5分。
- JR利用の場合  
JR「新大阪」駅から、JR京都線(東海道本線)「京都」方面行(快速・新快速を除く)で「吹田」駅下車(この間約5分)の後、阪急バス「JR吹田北口」停留所から「関西大学」停留所下車(この間約7分・25分間隔で運行)、徒歩約7分。

### 大阪(梅田)からのアクセス

阪急電鉄「梅田」駅から、千里線「北千里」行で「関大前」駅下車(この間約20分)、徒歩約5分。または京都「河原町」行(通勤特急を除く)で「淡路」駅下車、「北千里」行に乗り換えて「関大前」駅下車。

### 大阪(伊丹)空港からのアクセス

大阪モノレール「大阪空港」駅から「門真市(かどまし)」行で「山田」駅下車、阪急電鉄に乗り換え「関大前」駅下車(この間約30分)、徒歩約5分。



2018年度 日本生物工学会大会 展示会

出展申込書

2018年 月 日

出展社案内のホームページや、出品目録で英文併記しますので、お手数ですが必ず下記項目をご記入ください。

会社名 和文 \_\_\_\_\_

英文 \_\_\_\_\_

ご連絡先 和文 住所 〒 \_\_\_\_\_  
TEL. \_\_\_\_\_ FAX. \_\_\_\_\_

英文 住所 \_\_\_\_\_  
TEL. \_\_\_\_\_ FAX. \_\_\_\_\_

ご連絡先 E-mail Add \_\_\_\_\_

ホームページ URL \_\_\_\_\_

ご担当者名 \_\_\_\_\_

担当部署名 \_\_\_\_\_

申込小間数 ( ) 小間	使用電力量 100V( )W 200V( )W (単相・三相)	展示出品台 ( ) 小間必要 ( ) 小間不要
-----------------	---------------------------------------	-------------------------------

出品料金

電源仮設料金

展示出品物	寸法			重量 (kg)	点数
	幅(mm)	奥行(mm)	高さ(mm)		

申込締切日：2018年6月29(金)